C：天神祭（12月17日の祭り）について

天神信仰は、古くは天(山)から降りてきて豊作を約束する素朴な信仰の神でした。
後に、菅原道真の天満天神が出てきて、その中に組み込まれて、現在のような信仰になりました。
小松の天神祭りは、麦まきが終わった後の1年をしめくくる祭りで、天神様に対しての収穫感謝のお祭りですが、
一説によりますと、源平合戦の慰霊祭を兼ねるとも言われております。小松の人は天神様を隠れ蓑（かくれみの）にして、
平家を哀悼（あいとう）していたと伝わっています。（この様なことは、他の地域でも良くあります。下記の理由ではないでしょうか）

神戸の北野天満神社は治承4年（西暦1180年）6月に平清盛が京都から神戸に都を移し【福原の都】をつくるにあたって、
京都の北野天満宮より勧請（かんじょう：神仏の分霊を他の場所に移しまつること）して祀られたと伝わる神社で、
以降、神社周辺の地域は【北野町：現在は北野異人館街となっています】と呼ばれるようになります。
【昔（圃場整備前）、小松の南側の平園（又は平蔵野【へいぞの】）の地に天神社があったが、現在は小松神社の境内（敷地内）に石碑を移されたと聞く。】

天神祭（てんじんまつり・てんじんさい）は、一般的には全国の天満宮（天神社）で催される祭りのことです。
祭神の菅原道真の命日にちなんだ縁日で、25日前後に行われています。1年のうち1月の初天神祭など、ある月毎に盛大に
行われているようです。各天満宮（天神社）で行われる天神祭の中では、京都の北野天満宮の祭りは質素ですが、
大坂天満宮の夏の天神祭は、日本三大祭りの一つで、7月25日（菅原道真の生誕の日）の本宮の夜は、かがり火・提灯・
奉納花火と水の祭典として有名です。

【菅原道真：　すがわら　の　みちざね】【一般的には天神様と呼ばれている】（農耕の神、学問の神、厄除の神、etc）
　[農耕の神]：雨を降らす雷を古代人は天神として崇（あが）めた。秋のずいき祭は天神信仰の姿とされる。
　[学問の神]：道真は早くも5歳で和歌を詠み、11歳で漢詩を作り、14～5歳で天才と賞賛され、後には「文道の太祖・風月の本主」と仰がれた。
　　江戸時代に寺小屋が庶民の教育機関として普及し、毎月25日には「天神講」が行われ書道の上達と学業成就（じょうじゅ）を祈った。
生年月日：承和12年6月25日（西暦845年8月1日）
死没　　：延喜3年2月25日（西暦903年3月26日）
職業　　：平安時代の貴族、学者、漢詩人、政治家
官位　　：従二位・右大臣　（追贈　太政大臣）

菅原氏は代々学者の家柄で、道真の父・是善（これよし）も学者として知られていた。
菅原氏の教え子は、当時の朝廷に数多くいた。
道真は幼少より詩歌に才を見せ、貞観4年（西暦862年）、18歳で文章生となり朝廷に仕えていた。
その後、宇多天皇の信任を受け、元慶元年（西暦877年）33歳で式部少補に任ぜられ，「文章博士」となる。
藤原氏の勢力の強い時代、藤原基経の子の三兄弟（時平、仲平、忠平）の中傷にもかかわらず、道真は出世する。
寛平9年（西暦897年）、宇多天皇は13歳の皇太子敦仁（あつひと）親王（醍醐天皇）に位をゆずり、上皇となる。
醍醐天皇の治世でも道真は昇進を続けるが、道真が主張する中央集権的な財政に、朝廷への権力の集中を
嫌う藤原氏などの有力貴族の反発が表面化するようになった。
藤原時平は、藤原氏でもない道真が出世していくことを快く思っていなかった。
昌泰4年（西暦901年）に藤原時平が従二位・左大臣を、菅原道真も従二位・右大臣の位を受けるが、
藤原氏の思惑通り（時平が太政大臣、弟の仲平が左大臣、次の弟の忠平が右大臣になる構想）
にいかないことと、時平を追いこして道真が太政大臣になるのではないかとおそれて、帝の醍醐天皇へ、
道真が朝廷に謀反（むほん）【醍醐天皇の弟で、道真の娘むこである斎世親王（ときよしんのう）を天皇の
位につけようというたくらみ】を企てていると直訴する。
こうして、時平の陰謀で、道真は無実の罪で官をさげられ、延喜元年（西暦901年）九州大宰府へ流罪追放になる。
また、四人の子ども達も、土佐、越後、遠江、播磨の各地に流罪として流された。
（この事件の背景については、藤原時平による陰謀説から、宇多上皇と醍醐天皇の対立が実際に存在していて、
道真がそれに巻き込まれたとする説まで諸説あるそうです。）
菅原道真が京の都を去るときの詠んだ歌は有名です。
【東風吹かば　にほひおこせよ　梅の花　あるじなしとて　春なわすれそ】
（詩訳：梅の花よ、私がいなくなっても、来年、東の風が吹いたら、春が来たことを忘れずに、花をさかしておくれ。）
また、その梅が、京の都から一晩にして道真の住む九州大宰府の屋敷の庭へ飛んできたという【飛梅伝説】も有名です。
道真は延喜3年2月25日（西暦903年3月26日）、この恨みを抱えたまま九州大宰府の地で亡くなります。
そして道真の死後、京には異変が相次ぎます。道真の政敵である藤原時平が39歳の若さで病死、
その後、時平の家族が次々に亡くなったり、天災が相次ぎ、疫病が流行。御所の清涼殿に雷が落ち、続いて、
醍醐天皇が逝去（せいきょ・死の尊敬語）します。京都で起こる災いは道真の祟りと恐れた朝廷は、その霊を鎮めるために
お祀りしたのが京都の北野天満宮です。神号を【天満大自在天神】としました。これが天神様の誕生です。

肥前（佐賀）の天神祭
天神（道真のこと)信仰は、今では合格祈願や学問の神様として有名ですが、もともとは御霊信仰から出発したもので、
菅原道真の御霊を慰（なぐさ）める信仰となり、農耕の神として、天災をなくして五穀豊穣を祈る農業推進の役を担っています。
特に祭礼を繰り出すということはほとんどなく、村の家々が輪番で祭りの世話役にあたり、
氏神の拝殿や、当番宅で村中寄り合い、飲食を共にするという様な例が多いようです。
天神田などの祭田を耕作し、その収入によって運営される場合もあり、料理の中心は赤飯とされています。
肥前（佐賀）の天神祭は、ほとんど12月25日前後に行われています。

最後に
天神祭の掛軸について
【南無天満大自在天神】と書かれています。
意味
【南無】：namas<ナーモ>インドのサンスクリット語を中国で漢字にて音写（帰命する。帰依する。おまかせする。感謝する。の意）
【天満天神】：菅原道真のこと（菅原道真の霊を神格化した呼称）
【大自在】：融通無碍（ゆうづうむげ）の意味・・・・・自由自在に見方、考え方を変え、よりよく対処していくことのできる心。又はその人。
【自在】：vasita<バジータ>インドのサンスクリット語を中国で漢字にて音写（さしさわりのない。の意）（無碍と同じ意味）
集計すると【融通無碍の菅原道真に帰依します】の意。文芸の神様である菅原道真の力にあやかりますとの願いを込めた掛物。
追記
【南無阿弥陀仏】の意味　（浄土教の念仏）　<菅原道真には全く関係ないが、掛軸に南無が出てきたのでなりゆきで調べた。>
【南無】：namas<ナーモ>インドのサンスクリット語を中国で漢字にて音写（帰命する。帰依する。おまかせする。感謝する。の意）
【阿弥陀】：amita<アミータ>インドのサンスクリット語を中国で漢字にて音写（かぎりない。絶対なる。無量・無辺。の意）
【仏】：Budda<ブッダ>インドのサンスクリット語を中国で漢字にて音写（目覚めた人。悟った人。の意　　仏陀とも書く）
《念仏（お経も同じ）の漢字にはまったく意味がなく、インドのサンスクリッド語の言葉を中国で文字に直すときに当て字をしたもの。音写したもの。》
集約すると【帰依します。み仏様】【おまかせします。み仏さま】【感謝します。み仏さま】【Embrace my Budda】の意味